

4

## ドラマセラピーの実践・研究・手法

劇映画「カリーナの林檎」と  
研究方法としてのエスノシアター(Ethnotheatre)

尾上 明代

今回は、社会臨床としての役を果たす劇映画の力、そして芸術を使った研究（かつ実践）方法としてドラマセラピストたちも採用するアプローチの一つ、エスノシアターについて解説する。

### 天啓の映画

去年のクリスマスに、複数の知人から薦められて「カリーナの林檎～チェルノブイリの森（2020 版）」という映画を見た。クリスマスから数日間、特別に YouTube で公開されていたものだ。この映画の監督である今関あきよさんの Facebook やインタビュー番組によると、2003 年（事故後 17 年の時点）に、何も頼るものがなく資金的にも厳しい中でチェルノブイリへ向かい取材し、数々の苦労を乗り越えてベラルーシで撮影したという完全な自主制作映画である。原発事故で被災し、放射能に起因する病気や家族離散で大変な悲劇に見舞われたベラルーシの住民の様子が、主人公の少女カリーナを中心に描かれている。「ドキュメンタリーではなく、敢えて劇映画として映画にした」そうだ。今関さんは、「まだ何も終わっちゃいない原発事故を、無かったことにしたくない！」という気持ちから、2020 年版の作成と無料配信公開に踏み切った」という。2003 年時点では日本国内で原発事故が起こる可能性があるという警鐘は大多数の人の耳には聞こえていなかった。この映画は当初、日本よりも本国のベラルーシへ向けられた映画だったそうだ。今となっては、このような意義深い映画をよく 2003 年に撮ったものだと驚きと心からの敬意で一杯になる。今関さんは、「最初は正直興味本位、怖いもの見たさだった気がする。ラジオで清志郎の反原発ソングが放送禁止というか自主規制されてるという話をしているのを聞き、単純に何でだろう？と疑問を持ち始めたのがきっかけだ。」と発言しており、あたかも「たまたま」の

ように聞こえるのであるが、このきっかけは、まさに天啓に違いない。ご本人にとっても、映画に関わった方々にとっても、現地の方々にとっても、そして日本人たちにとっても。

完成した 2004 年当時と、2011 年の東日本大震災後とでは、地球におけるこの映画の意義は全く変わってしまった。今関さんは、撮影した時点では、反原発や脱原発を訴えるためではなく、基本的にはバラバラになってしまった家族の物語を撮ったと言うが、311 を境に「他人事が、自分ごとになった。幾つかの場面で、そのシーンの意味合いが変化した。」と述べる。2011 年 4 月以降、何度も福島へ向かい原発を撮影、2020 年にも、この映画の 2020 版のために再撮影を敢行した。

## カリーナの林檎

ここからは、どうしても映画のネタバレが含まれるが、内容全体は敢えて書かないので、ご覧になっていない方にとっては、少しわかりづらいところがあることをお許しいただきたい。まだの方には是非ご覧いただくことを強く薦める。

主人公カリーナの祖母、母、そして本人も病気に罹っている。母とカリーナは入院しているが、祖母だけは高濃度に汚染された地域にある自宅を離れずに住み続けていた。監督の話によれば、「汚染されていると知りながら、その場所を離れようとする人」はサマシヨロと呼ばれていて、これは事故以降にロシアで生まれたことばだという。もとの意味は、自由きままな人。「つまり、勝手に選択して住んでいる人、という意味になるのだが、自分の家に住んでいる人なので、このことばはおかしい。」と監督は訴える。社会がこのような具体的な呼び名まで創り出し、いかに被災者に寄り添っていないかがわかるエピソードだ。映画の舞台になっている場所は、本当に美しい自然に囲まれた土地で、事故前後でその風景は一つも変わっていない。住みなれた土地と家に居続けたい人が、このようなことばで見捨てられていくのではないか。

カリーナはバーブシュカ（おばあちゃん）とこの地が大好きで、母親に「なんでバーブシュカのところに住んじゃいけないの？」と聞く。母親は「それは悪い魔法使いのお城のせい。チェルノブイリに悪い魔法使いのお城があってベラルーシに魔法使いが毒をばらまいているのよ。その毒は見えないし、匂いもないの。それで皆が病気に・・・」と答える。彼女は、映画の最後に、自身の病気も顧みず、たった一人で（正確には、ぬいぐるみと 2 人で）バーブシュカを救うために、冬のチェルノブイリの森の中を突き進んで行ったのである。子どもの世界の怖さと大きさが二重写しになっていて、見る側への衝撃が大きいシーンだ。そしてカリーナのひたむきなバーブシュカへの想いが一つの大きなメッセージともなっている。みんなが見捨てる世界こそが一番大事なところなんだと。そして、たった

一人で立ち向かうことと、あの世へ旅立つこととが重なっていて、被爆が原因の病気で苦しみ死んでいく子どもたちの闘病に大きな意味を与えていると思う。「ベラルーシ国立小児血液学センター」で、カーリーナと一緒に入院している子どもたちとして映画に登場したのは、役者ではなく実際に入院していた子どもたちだ。そのうちの 1 人は原因不明で顔や目が異様に膨れ上がっていた。一目見ただけで、誰もがそのあまりにも痛ましい姿に胸が塞がれたことだろう。その子どもは、撮影の一週間後に亡くなったそうだ。このような現実があるからこそ、魔法使いに負けるな、やっつけろと、カーリーナが誰の助けも借りずに森に赴き、子ども一人ひとりの孤独な戦いと、彼らの生きようとする強さを表現したことに、格別な意義がある。

ところで、森へ行くまえに、カーリーナがバーブシュカの家を窓を外からそっとのぞくシーンがある。バーブシュカが家の中からふと気配を感じて外を見るところは、ロシアやウクライナの民話で精霊などが窓からのぞく、という話が土台になっているのではないかと思った。つまりそのときカーリーナはすでに霊化していた、身体はそこにはなかった、とも解釈できる。そうすると、カーリーナの森への戦いは、カーリーナの心の中のことだったかもしれない。実はカーリーナは病室にいて彼女の思いが描かれている、とも言えて、現実的に病室で病気と闘う子どもたちの思いと完全に重なる。「カリンカ」という非常に有名なロシアの歌がある。「カーーーーー（と長く伸ばしたあと）リンカ、カリンカ、カリンカマヤ（私のカーリーナちゃん）」と、どんどんスピードアップして歌われるこの曲を、聴いたことがある方は多いと思う。ロシア民謡が好きだった私の家族が、私の小さいころ、この曲のレコードをよくかけていて、「カリンカ、カリンカ」と踊っていたのを思い出す。調べてみると、カーリーナという名前はガマズミという意味で、カリンカは「カーリーナちゃん」という愛称のようなものである。歌詞の中に、「カーリーナの咲いている庭の片隅に私を埋葬してくれ」という部分があり、この歌と名前からも、映画のカーリーナが亡くなることを予感させる。強く美味しい果実（ガマズミ）を生らせるカリンカ（カーリーナちゃん）と共鳴し、スラブ系によくある子どもの名前の一つであったのだ。私は、あまりにも美しいベラルーシの風景とチェルノブイリ原発のコントラスト、そしてナスチャ・セリョギナ演じるカーリーナの愛らしさと強さに文字通り、胸が締め付けられた。

私がこの映画に惹きつけられた一番の理由は、これが「ドキュメンタリーではなく、敢えて劇映画として」制作されたということである。もちろん、原発事故、また他のどのような社会的な問題がテーマになった映画でも、実在の人たちへのインタビューなどから今まで見えなかった「現実」を引き出すような大変優秀なドキュメンタリーがたくさんあることは確かだ。（たとえば、最近では立命館大学人間科学研究科で実施している東日本家族応援プロジェクト 10 年目のオンライン・シンポジウムで、福原悠介監督の「飯館村に帰る」という非常に素晴らしいドキュメンタリー映画を拝見した。）その上で、今回はノンフィクションである現実を、劇というフィクションの形で訴えることの力について考えて

みたいと思って「カーリーナの林檎」を紹介した。この映画は、間違いなく社会臨床としての役目を果たしている。あるいは社会を変える契機として、または我々一人一人が、行動を起こす・実際の行動を変えるイグニッション（点火装置）として見ることができる。

戦いは始めた、あなたはどうする？とカーリーナがメッセージを出している。「ソシオドラマ」を創り実践したモレノや、「被抑圧者の演劇」を創り実践したボアールと同じである。いや、カーリーナの死を賭しての訴えはそれ以上である。フィクションであるゆえに、しっかりとメッセージを心身が受け止め、反芻するように内部からさまざまな思いが湧き上がってくる。

## 映画公開の様子

今関さんは、2004年に完成したとき、公開するかお倉入りにした方が良いかを随分迷ったという。現に、完成直後にリトアニアとベラルーシで公開が決まり、フィルムの荷造りを済ませ、あとは飛行機に載せるだけのところで、阻止されたこともあったそう。しかし監督は、「ある意味命がけのスタッフがたくさんいたので、その人たちを思うと消し去るのは忍びない」と考えた。その後、2007年ごろになってウクライナの小さなスペースで、またイタリアの教会で上映された。日本では2010年ごろに公開する予定で準備をしていたら311が起き、「また別な意味で公開できない」と思ったという。「311後、カメラマンと福島に行った当時は、ガイガーカウンターを持っている人はいなかった。自分たちはもっていたので、少しは身を守れる手段が一つある、危険度が多少わかると思った。さすがに焦った。チェルノブイリと違って、自分の国で起きているということもあるがショッキングだった。福島から帰ってから、かなり落ち込んだ。」と述懐している。

日本で最初に上映されたのは大阪の高槻で、2011年9月のことだった。風雨の中大勢のお客さんが押し寄せ、立ち見まで出て、この日を境に「カーリーナの林檎」は、大きな波紋となって、様々な場所での公開が実現していったそう。2か月後にロードショーとして東京で1回上映されてから、全国各地で日の目を見ることになった。今関さんは、その後の上映の様子を以下のように語る。

印象的なのは放射線への恐怖から沖縄や北海道などへ、自主避難した方々からの自主上映をさせて欲しいという要望がとても多かったことだ。なかなか自主避難者への理解が浸透していなかったこともあり、自分たちの想いを代弁する「何か」を求めていたのだと思う。北は釧路、そして南は沖縄まで様々な方々とお会いし、その大半は母子避難の方が多く、お父さんは避難せず仕事の為に元の場所に残ったままだった。日本でもカリ

一ナと似たような境遇の家庭が少なくないと感じた。日本での公開が落ち着く頃から、アメリカ、ドイツ、ロシアと上映が始まり、各国を映画に寄り添いながら渡り歩いた。

福島県でも見たいという方々に向けて、郡山のライブハウスで上映された。福島での危険を煽る映画ととらえて怒った人もいたそうだ。当然ながらさまざまな反応や意見があったことと思う。「今関さんは、楽屋に戻って号泣していた」とそのとき一緒にライブで映画の主題歌を歌った歌手の方がインタビュー番組で言っていたが、号泣の理由はご本人からも詳しくは語られなかった。

## エスノシアター(Ethnotheatre)

エスノシアターのルーツは、人類学者のエスノグラフィー研究である。1980年代に人類学者 Victor Turner の performing ethnography (演じるエスノグラフィー) に大きな影響を受けた。Turner 自身は学生たちと研究対象部族の儀式や催しについてのエスノグラフィーを演じることで実体験をし理解する、という実践をしていたようだ。その後、1990年代に Jim Mienzakowski らが演劇脚本としての研究報告をエスノドラマとし、2000年代に入ってから、Johnny Saldana らが演技・上演するエスノシアターという分野を確立した。Mienzakowski、Saldana、そして Denzin らは、フォーカスグループや個人のインタビューから真に生きられた経験を描き出すには、劇は決定的な手段になるとしている。

エスノドラマとエスノシアターは両方とも研究報告を劇の形で実施する方法と言えるが、研究者によりそれぞれの定義が少し異なる。本稿では定義の検討が目的ではないため、Saldana の簡潔な定義を採用し、エスノドラマはインタビューその他のデータをドラマ化した脚本、エスノシアターはそれを観客へ向けて上演する演劇という認識で進めていく。さまざまな実践と取り組みがなされているが、リサーチ方法として非常に価値のあるものであると考える。上記のように、エスノシアターのルーツは人類学であるが、演劇を使っていることから、芸術のプロセスを研究の中に組み込み省察するアート・ベースド・リサーチ (Arts-based research) でもある。Saldana が強調するのは、エスノシアターには社会的なテーマが入っていることと、芸術的であることの両方が必要だという点である。特に、演劇のバックグラウンドがない研究者に向けて、演技や劇の制作がしっかりと芸術的なレベルにあることが大切で、台本化、演技法、舞台技術などの研鑽が望ましいと述べている。もちろん個々の事情や条件の中でベストを尽くせば良いと思う。

そして「カーリーナの林檎」はドキュメンタリーでなく現実をもとに創った「劇映画」という点において、エスノシアターであると言うことが可能である。映画の最後にカーリーナのナレーションが入る。

私は死んだの・・・でも悲しまないで。

「昔むかしカーリーナという女の子がいました」で始まるおとぎ話のような物語なの。

そして画面のテロップは、「物語だけど現実です。それはたくさんの取材をもとに制作されているからです」と続く。映画の中に、実際の病児が映し出されている演出もあいまって、紛れもない現実を、フィクションという強力な武器を使って社会に突き付けているのである。Saldana は、エスノドラマ・エスノシアターは教育や社会変革などさまざまな目的に使うことができるとしているが、私は、中でも社会が無知な、忘れられつつある、あるいは重要視していない人々の声を社会に届ける、という目的を果たすために有用であると考え。この映画を見ればそれはすぐにわかる。もちろん今関監督は研究をするという意識で制作したわけではないと思うが、この映画が観客たちに影響を及ぼし、鑑賞後にその言動が変わったとすれば、社会臨床の実践となり、また広い意味でのアクションリサーチになるとも言える。

「決して泣かないで下さい。泣いても何の解決にもならないのだから。」これは、映画の画面に映し出されたベラルーシ国立小児血液学センター医師のことばである。映画の最後を見て泣いた観客は多いと思うが、このことばにハッと現実に戻される。そして、自分のできる範囲で具体的にできる何かを考える。それは、多くの人にとって、今の日本で何ができるかということである。映画の最後には「悪い魔法使いのいるお城」が映し出され、「チェルノブイリ原発 4 号炉は、いまでも大量の放射線を発し続けている。」というテロップが入る。2020 年版は、それに続いて福島原発の映像が入った。さらに、2020 年 12 月の映画公開のメッセージの中で今関さんは、「こうしている今も、福島第一原発から、強烈な放射線が発し続けていることを意識して欲しい。」と記した。

## カーリーナ役のナスチャ・セリヨギナ

本稿の最後に、あまりに愛らしいカーリーナを圧巻の演技で表現したナスチャ・セリヨギナのエピソードを紹介したい。彼女は実はそれまでまったく演技経験ゼロの 8 才の普通の少女だったことを知り大変驚いたからだ。監督によれば、なかなかカーリーナ役が見つからずキャスティングは難航したということだ。撮影地ベラルーシでは見つからず、モスクワ

でオーディションをしてやっと見つけたのがナスチャだった。

毎日とても元気に撮影に臨み、「素人」であったのに、セリフはすべて覚えていて、現場では台本を一度も手にしたことがなかったそうだ。ときどき、監督が助けようとしたときも、それを遮り「だいじょうぶ、ちょっと待って、分かってるから…！」という頼もしさだった。そして、感動的なラストシーンに関しての監督の裏話がとても良い。脚本の中で唯一、変更した場面だそうだ。

シナリオでは横たわったまま動かないカーリーナのロングショットを長く見せて、そのままエンドロールだ。そして、私は雪の上に横たわるナスチャ(カーリーナ)に「あのね、やっぱり、カーリーナはまた頑張って起き上がって、悪い魔法使いのいるお城に歩き出すことにしたいと思うんだけど、どうかな」と、話してみた。彼女は明快だった。「うん、その方がいいと思う。」こうしてこの映画のラストは今の形となった。

現在は二児の母親になり、モスクワで元気になっているという。今振り返ると「カーリーナ」の体験はどんなものだったか、その後の彼女の人生にどのような影響を与えたのか、できることなら聞いてみたいと思った。

## 参考文献&資料

- Saldana, J. (2011) *Ethnotheatre: Research from page to stage*. New York: Routledge.
- Snow, S & D'Amico, M (2015). The application of ethnodrama with female adolescents under youth protection within a creative arts therapies context. *Drama Therapy Review*. 1:2. pp.201-218.
- Doi: 10.1386/dtr.1.2.201\_1
- Snow, S et al. (2017). Ethnodramatherapy applied in a project focusing on relationships in the lives of adults with developmental disabilities, especially romance, intimacy and sexuality. *Drama Therapy Review*. 3:2. pp.241-260
- Doi: 10.1386/dtr.3.2.241\_1

[今関あきよし Akiyoshi Imazeki | 公式サイト \(a-imazeki.com\)](http://www.a-imazeki.com)

<https://www.facebook.com/akiyoshi.imazeki>

[\(447\) 映画「カーリーナの林檎 チェルノブイリの森」 Web 予告・YouTube](#)

[\(447\) 「カーリーナの林檎 チェルノブイリの森」現地取材ドキュメント・YouTube](#)

[\(447\) Oil in Life Vol.42 : 今関あきよし / Rose in many Colors 映画「カーリーナの林檎」 - YouTube](#)